

リメンバー・パールハーバー

和田 奈良子

明日は真珠湾に行こうと思った。ワイキキのホテルからは、郊外バスで約一時間掛かるらしい。途中、一回乗換があると案内所に書いてある。判るだろうか。少し不安であった。というのも、バスの運転手が車内アナウンスをしないからだ。

一度、ヨットハーバーに行ったが、乗っている間中、ずっと前方の左側ばかりを見詰めていた。ヨットが見えてきて、幸い降りる人が多かったので、窓際の降車合図の紐を引かなくても続いて降りることができたが、郊外バスになるとそうはいかないようだ。

翌朝、フロントでバスの乗り場を尋ねた。「パールハーバーに行きたい」と言うと、ホテルを出て左方向を指し示した。ついで、「二十番のバスです」と言う。「八番ではないの」と聞くと、「いいえ、二十番ですよ」と言う。私は案内書を見せて、数字のところを示したが、彼女には判らなかつたようだった。

「ちよつと待ってください」

奥へ下がり、今度は日本語を話せる男性従業員を連れてきた。

「パールハーバー、ですか」

「そうです。それで、この案内書には八番に乗ってアラモアナで乗換えと書いてあるわ」「ああ、この案内書ですね。これちよつと違いますね。今は二十番に乗れば、勝手に連れて行ってくれますよ」

その案内書は、ホテルのロビーに置いてあつたものだったのに。

「一人で行かれるんですか」

「ええ」

「迷子になれないように」彼は陽気に笑つた。

ホテルを出て歩きながら、奇妙な気がした。真珠湾という言葉に対して、ホテルの人たちのさたりとした受け答え。こだわる私が古いのだろうか。歴史はもう遙か遠いものになつてしまつたのだろうか、と思つた。

バス停で待っていると、間もなく二十番がきた。前から乗車し、料金箱に六十セントを入れるとき、「パールハーバーに着いたら、教えてください」と運転手に頼んで、外の見える斜め後ろの席に腰掛けた。停車する度に乗客が増えていった。横に男女が座つた。とたんに、私は窮屈な姿勢になつた。三人掛けのシートなのに、横の女性からぐいつと腰に圧力が掛かつたのだ。乗ってくる人は、みな体格がよいのである。

しばらく行くと運転手が「アラモアナ、アラモアナ」と繰り返した。そこがバスの主要な起点になつていたので、肝心な所だけは知らせてくれる。

そこからまた、運転手は黙ってしまった。乗車してから、もう五十分に近い。ホテルで貰つた地図には真珠湾は載っていない。ワイキキ周辺が大きく案内されている。旅行社からの薄い案内書の中に、オアフ島の略図がある。ずい分深そうな入江の奥に、真珠湾と書いてある。ときどき海は見えるのだが、その入江の感じからして、まだ真珠湾ではなさそうに思えた。さらに、十分が過ぎた。

突然、左手に明るい海が見えた。一際目立つコンポーズブルー（少し緑が入っているブルー）だ。前方に、白く背の高い建物も見える。バスが停車した。大勢の人が続いて降った。急に腰の辺りが楽になった。横の二人が立ち上がったのだ。

「パールハーバー？」

思わず大きな声で運転手に尋ねた。周りの視線が私に集まった。

「オー、パールハーバー」

彼は私の存在を忘れていたのだった。降りて左へ渡れ、と指差した。バスが去った後、私は先ほどのお尻の大きい人に追い付いた。赤いスカートは、目標になって助かった。

車がたくさん止められている。きれいに刈り取られた芝生の間に歩道があった。

これが、真珠湾に続いている見学者記念センターへの道だった。入口で立ち止まった。

正面に、巨大な錨が置かれている。戦艦アリゾナ号のものだという。

センターへは、整理券をもらって一人ずつ入るようになっていた。

「一人か」

日本語で言われた。十七番の整理券が手渡された。

「十四番までの整理券の方、ドアの前に進んでください」

日本語の場内アナウンスが聞こえた。左手に観光バスが止まっていた。日本人の観光団なのだろう。

センターの中では、真珠湾に関する歴史を再現して見せているようだった。私は、建物の外に通じる廊下から海の見える芝生に出た。

遠くに湾の入口が見える。そこに、セピア色の塊がある。じつと見詰めていると、それは確かに巨大な軍艦だ。周辺にも船がいるようだが、視力の弱い私には、はっきりした輪郭はつかめない。かなり手前に、白いかまぼこ型の物体が浮かんでいる。それが、アリゾナ記念館である。その下に、戦艦アリゾナ号が沈んでいるのだ。

見学者たちを乗せたボートが、ドックから記念館に向け、何度も行き来していた。ボートが通り過ぎる度に、白い波の下から、多彩に変化したブルーの色を見せてくれる。空も海も、その間に浮かぶ島のグリーンも、まるで絵具の色見本を見るようで、その美しさに魅せられ、しばらく呆然と見詰めていた。

私は建物の軒下に入って、四号のキャンバスを拵げた。この旅の最後のスケッチだ。芝生の上の椰子の樹を通して、湾の入口から手前の海を描いた。平凡なモチーフだ。かまぼこ型のアリゾナ記念館も入れた。

「ナイス」

突然、声を掛けられ振り向いた。初老の紳士が笑顔で立っていた。

「ワイキキでも描いていましたね」

上手に返事ができなかった。好意を見せ誉めてくれた人に、私は丁寧にお辞儀をした。

帰り支度をして、センターに戻った。噴水があつて、その周りにベンチがある。そこからも、椰子の樹の向こうに真珠湾が見える。私は、場内で買って来た「真珠湾を忘れるな」という本の日本語版を開いてみた。二十九頁の薄い本で、著者は十一年間日本に滞在し、宣教師をしていた女性で、内容は、アリゾナ号で死んだ母方のおじいさんを持つビルという少年が、真珠湾を訪れ、そこで見たもの、感じたことを物語り風にしてある。つまり、アメリカ側から見た歴史的事実を残そうとするために書かれたものであった。

文中の一節を紹介すると、

「ビルは、そこで言葉を止めました。そればかりではなく、彼の足もその場で釘付けになり、口は驚きで開いたままでした。ビルたちの前に、別の観光客の一団がいたのです。」

外国人の一団が。真黒な髪と、黒い目の人たちが。「日本人だ」と、ビルは口のなかで呟きました。「一体全体あの人たちは、ここで何をしてるんだろう？ 真珠湾のアメリカ艦船を爆撃したのは、あの人たちの国じゃなかったのか。歴史の教科書に何て書いてあったっけ？ そうだ、あの文は暗記させられたんだ。こうだった。『一九四一年十二月七日、日本軍はハワイ州真珠湾の米国海軍基地を爆撃した。その結果、アメリカは遂に戦争に参加することになった』」

とある。私はこの旅に出る前、不愉快なことがあった。旅行社から手渡されたビザの申請書を家に持ち帰り、書いているうちに手が止まった。髪の色、肌の色をチェックする欄があり、記入例が添えてある。髪の色には黒色に、肌の色には茶色にチェックするように、となっている。

翌朝、私はアメリカ領事館に電話した。

「どうして髪の色、肌の色を書かないといけないのですか。私たちでも隣国の人との見分けの付かないときもあるのに、アメリカ人から見ても何が分かるというのですか」

憤懣やる方ない思いであった。応対に出たのは、日本女性であった。電話の向こうで困った表情が見えるようであった。

「領事に申し伝えておきます」

そうとしか答えようがなかったであろう。それがまた、この「真珠湾を忘れるな」の文中でも肌の色が出てくる。主人公ビルが出会った日本少年サユキに対して、

「肌の色はまるつきり黄色でもないんだな、とにこつと笑った」

と書いている。アメリカ人は、特に肌の色に執着するようだ。

私は考え込んだ。もつと早くこの申請書を見ていたら、この旅行を取り止めていただろう。でも、四日後には出発することになっていた。いまさら、支払った旅行費を捨てるの

は惜しかった。

そんな気持で福岡を発つたのだが、きてみたら意外だった。爽やかなところだ。生活するには最適の気温で、食べ物は何でも美味しかった。殊に、新鮮な野菜や果物は、嘔むと口の中でサクッと快い音がした。何よりも、島全体の明るさが好きになった。

ところが、町を歩いて驚いた。目についた日本文字がある。大書してある。「ポルノ」「日本人大歓迎」である。それも一か所ではない。通りに面して幾つも見る。堂々とするのだ。他にも、幾つもあるのかもしれない。

ふと先年、ツアーで行った旅の終わりを思い出した。旅行中は好感の持てる青年がいた。帰国して税関を通るとき、みどりのカウンターで私の前に並んだ。彼のトランクが、検査台の上で開けられた。中身が無数に散った。ついで身体検査をされ、添乗員が飛んできた。いかがわしい本と、フィルムが出てきたのだ。その青年は確か学生の身分と聞いていたが、一体外国で何を学ぼうとしたのだろうか。

それにしても、「日本人大歓迎」の文字には驚かされた。「真珠湾とポルノ」私の頭の中では、どうしてもこの二つは結び付かない。

最近、日本人の海外への旅はすごく多い。好条件が揃っているんで、まるで経済大国のような錯覚を起こすのかも知れない。また、老後を外国で、と望む人も出てくる。それに反論して、老人を輸出するなど怒る国もある。

外国は決して楽園ではない。

私は旅を重ねる毎に、日本がどんなに小さな国かを知るようになった。外国人は日本に、好意ばかりを持ってはいない。それを剥き出しに感じたのは、ヨーロッパの西側を廻ったときだった。

「日本人？ この成り上がり者め」

といわんばかりの視線を感じたことがある。

ソ連の旅では、しみじみとその大国の威力を見せ付けられ、こんな国との間に戦いのあった恐さを改めて知った。
どんなにドルが落ちようとも、世界の通貨はやはりドルにある。と知ったのも、旅先でのことだ。外国を旅すれば、その度毎に緊張感が増す。決して反感を持たれることのないように、と考える。

真珠湾を最後に、六日のわが茶色の旅は終わった。帰る日の朝七時半過ぎ、迎いのバスがきた。同じ飛行機で帰る人たちを集めるため、旅行社から廻されてきたのだった。運転手は日本女性であった。空港への道々話し掛けてきた。

「一人で……ハワイに知り合いがあったの……何度も？」

「知り合いはいません。初めてでした」

「どうでした。どこが一番よかったですか」

「どこもよかったです。食べ物もとても美味しくて、でも海の色が一番綺麗に見えたのは真珠湾でした。真珠湾が一番印象に残りました」

本当は、ただ、海の美しさだけではなかった。簡単な言葉でしか言い表せなかったのは、初めて行ったところでもあり、その名前を四十六年前から知っていたせいでもあったからだろう。やはり、歴史は重い。

「リメンバー・パールハーバー」

この言葉は、何もアメリカ人ばかりのものではなかったのだ。

了

(付記)

作者は、平成十七年十二月没（八十一歳）